
予感

火野恭子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

予感

【Nコード】

N2887I

【作者名】

火野恭子

【あらすじ】

恋の予感、誰のものでもない私。

甘苦しい想い、君に逢いたい。

ただひたすらに逢いたいと願うのだけれど、

恋をしているんだねと言われれば、未だしていないと言っただろう。
逢って確かめたい。

君を目の前にして、あたしはどのような衝動に駆られるのか。
そう、衝動。

ここ何年も、少しの衝動も湧き上がらせた男は他に居ない。
だからこそ、安易に会えてしまう男ばかりが増える。

今この胸を焦がしている想いが果たして、
全てを凌駕しうるのかどうかを見極めたい。

この短い人生の中の、大切な時間を賭す魅力が、
本当にあるのか。

この心に抱いているのが、果たしてただの幻想なのか、
それを確かめたい。

未だあたしは、何も知らないに等しいのだから。

躊躇いはまだ心に燻ってはいる。

恋の予感という曖昧なもの、と思う傍ら、過去が示唆する。
あたしの恋の予感は、あまり、あまり、外れた事が無い。

どんな状況下であつても、一度気付いてしまったが最後、
メーターが振り切つて、現状を振り切つて、

追い継る人間を振り切つて、求めるその手を掴んできた。
「その手を選んだ後に、始まる世界が、怖い」

美しい名を持つ女はそう言っていたね。
ふたつの蜜月、彼女は恋よりも愛を選んだのだけれど。

真夜中に着信メロディ「遭難」。

「嗚呼、もうどうにかなる途中の自分が疎ましい」
そんな詩が乗るメロディ、少し、眩暈。
無邪気な君の声が誘う。

逢ったら引力に引きずられる、面倒臭い事になると、
分かって居ても抗える筈も無い。

「あなたを棄てる」そう宣言したのに、
追い継る手を振り払えない3年越しの男は既に眠りの中。
だけど揺り動かし起こして、

「少し出てくる。と会う」と言っ外に出る。
それがフェアだと思うから。

隠し事が事態を悪くするのを知っているから。

見慣れた車が停まる、7度目の君の助手席。

シートに滑り込むと week endの香り、また、眩暈。

神経質そうな君の細い指先、少し嫌味なフレームの無い眼鏡。
切れ長の眼であたしを見遣って、薄い唇が言う

「ようこそ、この夜へ」。

細身には三つ揃えのスーツ、ボルドーのネクタイ。

仕事を終えたばかりの姿。そういえば、スーツしか見た事が無い。

カチリと鳴るプラチナと漆の Dupont、セヴンスター。

セヴンスターの愛好者は頑固者が多いつてママが言っただ。

なる程、どうやらそういう気がする。

なぜいきなり呼び出したのか、聞きたいけれど聞いてはいけない。

「思いついたから」と、きつと答えるだろうから。

そこに「逢いたかったから」という動機を願う自分に気付く。

恋の匂いのする言葉を、まだ発する事は出来ないふたり。

言ってみようか。逢いたかったと。

だけと思いついてすぐ止める。

恋愛感情を持つているという表明をしてしまったら、

戻れない道に一步踏み出したという事。

あたしは君にとても興味を持っているけれど、それだけではとても恋だなんて言えない。好奇心が一段落ついた時に、何を思うのか。その時までには、踏み込みたい気持ちを抑えるだろう。どんな衝動も無い振りで佇むだろう。そしてあたしは、我慢はとてつもない快楽を産むと知ってる。決壊の日を鮮烈にするだろう事を知ってる。

「何処に行きたい？」等と聞いて来た事の無い君が、目指したのは海。何処に行くとも言わずに。

誰も居ない、頬を切るような風。車を停めて砂浜を歩く。

「寒い？」と聞く君が、どうしてか寒くなさそうで、「うっん。」とあたしは答える。

本当は凍える程寒いのに、毅然としていたくなる光景。

仄かに明るくなってる水平線、同じ景色を見る。

会話もせずに見蕩れる夜明け。

凍えた指に暖かい缶の紅茶。君は珈琲。

「帰るか」

そう言つて車に戻り家に向かう。

取り留めの無い会話。笑い合う。

もしこれが恋にならなくても、あたしはこの人が大好きだなあとふと思う。

一緒に居る時間が、本当に一瞬で、

この人とずっと過したら、あつという間に人生が終わるんだろうそんな事を考える。

次の約束は、いつも無い。

君が思いついた時に、あたしは呼び出される。それでいい。

玄関で靴を脱ぎ、化粧を落とす。

すやすやと眠る、男を見遣る。

まだどんな恋の予感も、この男を捨てるには至らない。

この男があたしにしがみつくと強さよりも強く、

引きちぎるようにモノにする男なんて、滅多に出るもんじゃない。

そしてもしこのまま現れずに、この男に生涯を費やしたとしても、きつとあたしは後悔しないんだらうと思う。

相手の気持ちに呼応してると言っても、

全ては自分で選ぶ事だから。

かつてはこの男も、同じ試練を越えた男。

なりふり構わない無鉄砲なまでの一途さと、切実な情熱で、

あたしの思考能力を奪い「落とした」男。

因縁深いあの男から、あたしを100%奪い尽くしてくれた男。

そして、自分のした事を知っている。

あたしという女もよく知っている。

他に好きな男が出来たら、何をしてもう戻らないと知っている。

だから、より効果的な方法で、あたしを留まらせる力は在る。

チンケな罪悪感や、義務感なんかじゃなく、

あたしを留まらせる術を良く知ってる。

「あたしは今、誰にも恋してないよ、アンタにも。」

そう正直に言ってもへこたれない男。

恋の予感じゃないけど、この男と共に在るかもしれない予感。

全てはまだ、ただの予感であり、何も見えちゃ居ない。

明日全く新しい男が出現し、強烈な恋に堕ちるかもしれない。

友人でしか在りえなかった男が、ツボをついてくるかもしれない。

寝息を立てる男。セヴンスターの男。友人たち。未知の男。

あたしはそつとベッドに滑り込む。

猫が一声鳴く。目を瞑る。

嵐の前の静けさ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2887i/>

予感

2010年12月18日14時56分発行